

## アメリカ史学会第40回例会 12月例会記録

合評会 兼子歩・貴堂嘉之編『「ヘイト」の時代のアメリカ史：人種・民族・国籍を考える』  
(彩流社、2017年)

報告者(編者)：貴堂嘉之氏(一橋大学)

コメンテーター：黒川みどり氏(静岡大学)

中村寛氏(多摩美術大学)

司会：野口久美子(明治学院大学)

アメリカ史学会第40回例会が、2017年12月9日、明治学院大学(白金キャンパス)にて開催された。本例会では、兼子歩・貴堂嘉之編『「ヘイト」の時代のアメリカ史：人種・民族・国籍を考える』(彩流社、2017年)の合評会を行い、本書の編者を代表して貴堂嘉之氏(一橋大学)、コメンテーターとして黒川みどり氏(静岡大学)と中村寛氏(多摩美術大学)をお招きした。なお、編者である兼子歩氏をはじめ、原著の執筆者の方々にも会場から積極的にご参加いただいた。

12月例会は前年度運営委員会による企画を引き継いでいるため、開会にあたって、宮田伊知郎氏(前会長)による趣意説明があった。まず貴堂氏が、本書刊行のきっかけと出版に至る経緯、刊行の目的について話された。本書を企画した動機は、2015年2月11日、産経新聞に掲載された曾野綾子氏のコラム「透明な歳月の光：労働力不足と移民」に象徴される、日本国内での人種、エスニシティ、ジェンダー・セクシュアリティに関するメディアの表象に対する「違和感」である。当時、その意識を共有したアメリカ史研究者らが迅速に動き、執筆・刊行に至った。本書は、アメリカ合衆国の事例から、カテゴリーや境界の恣意性、寛容/不寛容のポリティクスが生み出してきた(生み出している)ヘイトクライムの構造を取り上げ、その歴史性と論点を整理し、さらには、私たちの身近な問題に引きつけて議論を促す。貴堂氏によれば、本書は学術書というよりは啓蒙書・教科書的なものを目指したものである。

貴堂氏によれば、「アメリカ史研究者ができる歴史的实践」として本書が試みたのは以下の2点である。まず、「日本を問い直すためのアメリカ史」の記述。本書は、現在進行形のヘイトクライムにアメリカ史研究者がどのようにアプローチできるかの実践的試みを提示している。背景には、日本における戦後のアメリカ研究(アメリカ学会)の軌跡を見据えつつ、アメリカ史研究者が囚われてきたアメリカのソフトパワーという「呪縛」への警笛がある。次に、以上の試みの「教育的実践」。本書は歴史(アメリカ史)を学生向けの転換教育の中に取り入れ、その過程で、歴史修正主義に贖うための考察と議論を促している。貴堂氏は、本例会に執筆者の多くが参加されていることから、以上の点をまとめたうえで、会場からの補足も促された。

続いて、二人のコメンテーターにお話しいただいた。中村氏は冒頭、「答えの出ていない

問題を考える／暴力への『怒り』とともに冷徹に考える／いざとなったら『殺される』者として考える」という問題意識を提示し、本書のテーマである「ヘイト」を、現代的問題、さらには当事者問題として引き受けたうえで、各論文について、さらに異なる観点からのアプローチ方法を提議された。例えば、兼子論文に対しては、ジェンダーを商品化する近年の動向に対する見解、南川論文に対してはコミュニティの多義性や日米比較からの見解、梅崎論文に対しては移動できることと「移動を余儀なくされること」の差異を見据えた見解である。最後に、フィールドワークとともに理論研究にも力を入れる中村氏ならではの観点から、本書全体に対して質問を投げかけられた。具体的には、剥き出しの差別、「非意識的」差別にどのように働きかけるか、さらに、剥き出しの偏見を持ちながら尽力する人びとをどのように描くか（フィールドワークから）、自らに巢食う差別意識と向き合いながら、変化し得る他者を美化せずどのように捉えるか（暴力論から）、偏見、差別、集合的暴力の連関をどのように考えるか（暴力論から）、そして差異の強調が優劣をともなった差別に、平等の強調が同化政策に結びつく現状をどのように考えるか（記号論から）という点である。

最後に、部落問題を軸に日本の近現代社会の「ヘイト」を研究されてきた歴史研究者として、黒川氏は、「そもそもの出発点は、日本国内のヘイトにあった」とする本書の中で、部落問題がどのように位置づけられているかを探りつつ、いくつかの論考を取り上げてコメントされた。まず、合衆国のヘイトクライムの事例が、同国の保守派的ポリティクスと関連づけられるという本書の指摘に対し、日本におけるヘイトクライム（特に部落問題）は、根強い解消論に直面しながらも、保守派との親和性を越えて一貫して存在し続けてきたことを強調し、ヘイトを考える思想的基盤が（ヘイトはすでに解決したものとして）国内でさえ作られてこなかった歴史に警笛を鳴らす。その意味で「日本の多様な文化」指摘した本書の中でも、部落問題に関する言及が必要であったこと指摘する。

続いて黒川氏は、以上の論点を見据えつつ、一部の論文を取り上げてコメントされた。例えば合衆国における〈他者化〉と「黒人」構築の過程は日本社会における排外主義にも寄与していると述べる坂下論文に対して、そうした議論における部落問題の位置づけについて、大森・森川論文に対しては、「非差別部落のアイデンティティを打ち出す運動」の前衛化に対して、マジョリティが部落差別解消を唱える動きがあったことから、マイノリティの側からの「区別の両義性」について、それぞれ指摘された。また、「戦争や緊急事態における権力の乱用」を取り上げた和泉論文に対しては、関東大震災時の朝鮮人虐殺の事例を紹介された。

最後に黒川氏は、「日本人にとってのアメリカのヘイト」という、いわゆる「他人事」を、どう自己の問題とするか、ということ改めて問いなおし、日本社会では「外」の問題とされてきた部落差別は、私たちにとってアメリカ社会における「人種差別」問題とパラレルであると解く。一方で、黒川氏は、日本社会に起こっているヘイトスピーチに関する関心や実践的批判の弱さを指摘し、アメリカのヘイト問題は、日本社会における私たちの人

種問題、つまり、部落解放運動への眼差しを伴うべきであると改めて強調された。

その後、お二人のコメントに対して、貴堂氏と、会場の執筆者からの応答が行われた。また会場の参加者の間で、アメリカ史に関する知識がない学生に対して本書をいかに使用することが可能か、本書を高等教育の場でより効果的に用いるための実践方法などについての議論が行われた。

約40名の会員、非会員が参加した本例会は、盛況のうちに終了した。参加者の間では、大学における歴史教育（アメリカ史を含めた）の方法を模索する声が多く、本書が扱ったテーマに関する時代的要請の高さと本書刊行の意義を改めて実感した。多くの参加者があったという嬉しい悲鳴の一方で、時間の都合上、議論を十分深められなかったことは残念であるが、アメリカ史研究をどのように教育的実践と結び付けていくことができるか、今後「ヘイトの時代」を生きる私たちが国内外の議論で継続していくべき重要な論点を提示できたもの考える。

（文責 野口久美子）